

社會の概念

銅 直 勇

社會とは何であるか、即ち社會の本質的持徴^{*}を發見して社會の概念を決定しようとするのが本論文の目的である。今社會の概念を決定せんとするに當り、行論の便宜上先づスペンサアの社會概念より考察を始め次に様々なる形に於て彼の影響を受けたる彼以後の社會學者の主なる社會概念を檢討し、以つて最後吾人の見地に到達するところの道行にしたいと思ふ。吾人が今スペンサアを以つて考察の出發點とする所以のものは蓋し彼が、社會に就いて始めて稍明確なる定義を與へたるころの社會學者であるからである。勿論社會學の始祖と稱せらるゝコムトに於いて、社會の本質に就いて何等の觀念を覗ふことの出来ないといふ如きは不當の言であり、事實スペンサアもその社會有機體説の觀念や、Co-ordination, Co-operation. の觀念等社會概念の決定に就いてコムトに負ふところは決して少くないのであるが、しかしコムトは未だ猶社會の本質に就いて特に明確なる説明を與ふるなく、スペンサアの

Principles of Sociology. に至つて始めて What is Society. なる題目の下にこの問題が特
に一章として格段なる説明を與へらるゝに至つたのである。

*、に社會の本質的特徴をいふはデューイス及びヘルツドが an essential distinguishing mark. 又は the essential mark. なるふに當る。(Davis, *Psychological Interpretations of Society*, pp. 191, Ellwood, *Sociology in its Psychological Aspects*, pp. 14.) 或は單に本質をいふも別に差支ない。然し今特に特徴の二字を加へるのは、本質なる語によつて社會の構成原理を混同し、これを以つて社會の概念を決定せんとするの過誤に陥らざらんことを明ならしめんと欲するが故に外ならぬ。社會概念の決定は現にあるがまゝの社會をいふ事實そのものゝ本質を以つてすべく、社會を因果的に見てその構成原理を以つてすべきでない。即ち社會の本質的特徴とは、これある處必ずたゞ社會あり、これなくしては又全然社會の存在を考ふることの出来ないところのものでなければならぬ。故に又單に特徴の二字を以つてするも不十分であると思ふ。(この點に就いては高田博士著社會學原理第一二〇頁、一五五頁等參照)

今スペンサアの社會概念を見るに彼は先づ *superorganic*. と *organic*. とを區別して超有機體即ち社會が有機體と異なる點は、そが多くの個人の *co-ordinated actions* を意味するところの凡ての過程及産物を包括せる所にあるとしてゐる。(Principles of Sociology, chap. I. § 2.) 即ちこれによつて考へる時は社會の本質は統整されたる行動である。然し彼は尙別の處に於いて別の概念を以つて社會の本質を更に詳しく説述してゐるが、今其の要旨を見るに彼は曰く——人或は社會の存在は名目のみで實在するものは唯社會の單位のみであるといふかも知れぬ。例へば講演が了へると同時に聽

衆は消散して了ふが如く、社會はそれ自身 a thing でなく唯人々の或る整列 a certain arrangement of persons. に過ぎず、このこと猶國家を形成する國民に就いても同様にいひ得られるといふかも知れない。成程前の場合に於いては其の整列は一時的であるが然し後の場合に於いてはさうでない。即ちこの場合に於いては其の構成部分の間に恒存的なる關係といふものがあり、これによつて此等諸部分夫々の個性と異なる一全體 a whole としての個性をなしてゐる。かくて吾人は社會を以つて確に一の實體と認めるといひ、かくてスペンサアはこの社會なる一實體の諸部分中に恒存的なる諸關係があるといふことは一の生物を構成せる諸部分の間に恒存的關係があるに等しいとして彼の社會有機體説を述べてゐるのである。(op. cit. chap. I. § 212. 213.) 即ちこれによれば社會の本質はこれを構成する諸部分の間に恒存的なる關係があるといふことである。然るに彼は進んで第二卷に至ると又次の如くに述べてゐる。即ち「個人の單なる集團は社會ではない。社會學の意味での社會とはこの並置 juxtaposition の外に協働 Co-operation が行はるゝに至つて始めて生ずるのである。」

「協働は社會なくしては存せず、社會は又協働するが爲めに存在す」と。(op. cit. chap. Vol. 2, § 440.) 即ちスペンサアの社會の本質又は性質に就いて最も吾人の注意すべき點

は、彼が社會を a whole. Concrete unity. と考へたこと及び彼が社會を靜的には permanent relations. 動的には Co-ordinated action 又は Co-operation と考へた點である。

今スペンサアと略同様な社會概念をもつて居ると思はるゝは、スペンサアと同じく社會有機體説を奉じ、その影響をうけて居るルネウオルムスである。即ち彼は「Les Principes biologiques de l'Evolution sociale. p. 23. に於いて下の如く述べてゐる。「余の見る所によれば adaptation は社會的存在の最も一般的なる事實である。……………何となれば凡ての諸要素の solidarité は Panatomie sociale (即ち社會の體制)の第一の證憑特徴であり、其の action co-ordonnée 又は synergie (協同作用)は Physiologie sociale (即ち社會の機能)の第一の特徴である。然るに諸要素の連帶、そは體制相互の適應であり、統整されたる行動それは機能相互の適應である」と。彼に就いて吾人の今注意すべきはスペンサアが諸要素間の永存的關係といへる處をルネウオルムスは連帶なる概念を以つて之に代へ、又前者の所謂行動の統整、協働なる概念と同じきもの以つて後者は社會機能の第一特徴となし、且つ此等三つの概念を一括統合して「適應なる一生物學的概念に包攝したる點である。

尙スペンサアの永存的關係といふ觀念の系統をひいてゐると思はれるものにフ

アバンクスがある。即ち彼は社會を以つて多少永存的なる關係に結合せられたる人々の一團體であるといつてゐる。(Fairbanks: An Introduction to Sociology Pp. 3.)

今此等の人々の社會概念を見るに此等の人々は社會の本質的特徴を以つて協働行動の統整適應、永存的關係と見てゐるのである。然らば此等の概念が果して社會の本質として正當に承認し得らるゝものであるや否といふに、私はこれ等の概念をそのまゝ採用することは出来ないのである。即ち此等の特質が存在しても先づ第一にそれが彼の有心物の心的相互作用によつて行はるゝでなければそれは社會となることは出来ぬ。又それが心的相互作用によつて行はるゝとしても、これを以つて直ちに社會のあらゆる場合の本質と見ることは出来ないし、そのあらゆる場合が社會となるのでもない。且つ又統整、協働、適應、永存的關係等の概念は決して同一なる概念といふことは出来ない。私は行論の便宜上先づ第一の心的相互作用と社會の本質との關係に就いて少しく考察を加へて見たい。

即ち上來擧げられる社會の本質なるものは、それが第一に有心物の心的相互作用によつて行はるゝでなければそれは決して社會と呼ばれることは出来ないといふことである。社會に於いてはその成員相互の間に心的相互作用が行はれる。これは

實に社會的存立の第一條件であり、且つ又社會以外の——即ち有機體の構成部分の間には全く之れなき現象である。従つて社會と有機體との間に如何なる類似が存するにせよ社會が有する以上の特質を有機體が所有せざる限り兩者を同視することは到底許され難いのである。即ちギディングスのいつて居る如くに、社會に於ける成員相互の關係は有機體に於けるが如く細胞の凝着といふ如き物質的のものでなく、社會にはその成員をある關係に結合する心的なる社會的紐帶、即ち個人と個人との間に相互作用^{*}がなければならぬ。(Giddings: Descriptive and Historical Sociology, pp. 45.)

* ギディングスはこの處に於いて Same Communactivity or Some interactivity of individual minds. と云ひ、共通活動の相互作用とを「或は」の一語を以つて並立せしめて居るのであるが、これは更に深く考察すべき點である。然し今は只共通活動なる觀念は社會概念の決定上甚だ注意すべき觀念であるといふことのみをこゝに指摘して姑くこれを不問に附し、以下主として相互作用なる觀念によつて考察を進めて行くことにする。

今スペンサー、ルネ・ウオルムス、フエバンクスのいへる如き適應、統整、協働、永久的關係は之れが心的相互作用といふものを前提としない限り、此等の現象が存在しても、直ちに其處に社會ありといふことは出来ないといふ私の第一の提言に就いて考へて見る。第一に適應なるものは有心物の社會に限れる現象ではない。之れは凡ての

生類の間に行はれ又此等生物と無生物の自然との間に於いて行はれてゐる。故に適應ある所必ず只社會あり、社會ある所則ち適應ありといふとは出來ない。此の點に於ては後段更に説くべき時に譲る。又協働、統整、永存的關係といふとも亦同様である。例へば植物は根、莖、葉、花等相協働して以て其生活を營む、然し吾々は此等のものが社會を成して居るとはいはぬ。又時計の諸部分の運動は統整せられて時計の運行といふ一の全體的运动をなしてゐる。然し此等の諸部分を以つて社會を成して居るといふものはない。又茲に一脚の机あり、其諸部分は永存的關係をなして居る。然しこれを以つての故にこれを社會といふとは出來ぬ。協働も統整も永存的關係もそが人と人との心的相互關係なる限りに於いて始めて之を社會なりといふことが出来る。これスペンサアの社會概念より出發する時、論理的に又必然的に到達しなければならぬ見地であり、彼のスペンサアの社會有機體説を祖述したるツグレフやフイエが他方又意志結合説、契約説と握手するに至つた所以であると思ふ。然しこの意志結合説、契約説は所謂人爲社會の場合の説明には適當であるが、感情又は親和を主とする親和團結、自然社會といふ如きものを説明するとは出來ない。人間精神は意志のみでなく、感情あり知的過程もある。此等の分類は實は吾人の概念的便

宜によれる抽象であり實は分つべからざるものである。其の一を以つて社會の全般を説明せんとする如きは決して穩當なることではない。よし又吾人の凡ての行爲のある所必ず意志が働いて居り、吾々の意識は意志によつて始めて成立するといふことが眞理であるとしても、吾々が今社會の本質的特徴の如何を考究する場合社會そのものを因果關係に於いて考察してこゝに社會の構成原理を持來るべきでなく、又持來る必要はない。吾々は只社會の状態そのものに注意すべきである。

然る時吾々は吾々の考察の本道に立歸つて、然らば心的相互作用のあるところのもの即ちこれ社會であるかといふことを考へて見たい。今此説をとる主なる學者はスモオル、ジューメル及びスタッケンベルグの如き人々である。即ちスモオルは社會を以て多くの個人と個人との間に於て必然的に生ずる動と反動とによつて成立する人間生活の諸状態の觀象であるといつて居り (Small: General sociology. Pp. 405.) ジューメルは最も明快に多數の個人が相互作用をなしてゐる處、即ちそこに社會があるといつて居る。 (Simmel: Sociologie. S. 5.) スタッケンベルグも亦個人と個人との心的相互作用が社會の本質的觀念であるといつて居る。 (Stuckenbergs: Sociology. vol. I. Pp. 81.) 然しながら社會即ち心的相互作用説をとる時、こゝに打克ち難き一の重大なる難點に逢着

するのである。即ち之れは戦争の如き現象も果して社會といふことが出来るかといふ問題である。蓋し社會と社會現象又は「社會的」といふことゝは最も嚴密に區別しなければならぬ。心的相互作用は社會現象又は「社會的」なものゝ本質ではあるが、然し社會と社會現象とを同一視してこれを以つて社會そのものゝ本質とすることは出来ない。然しジメメルに於いては社會即社會現象、社會即心的相互作用であり、逆に又一切の心的相互作用は即ち社會であるが故に最も激烈なる心的相互作用であるところの戦争も亦當然社會と考へるのである。この點はスタッケンベルグも同様で、彼も社會は人間が孤立の状態から、協働或は對立、相依及相互の關係に移る時に出來るといつて居る。然しながら社會とは結合であり、結合である以上又何等の程度に於いて統一あることを見る。故に反對し衝突し相争へる個人と個人或は一團と一團との間にかゝる結合統一あると見るとはそれ自身矛盾である。勿論認識論的にいへば相争ひ相對立するは何等かの意味に於いて既に若干統一的關係に立ち入れるものともいひ得られないではあるまいが、然し社會とは有心物と有心物との全行爲の結合統一に於いて成立つところのものである。蓋し此等の學者が社會結合の概念中に猶反對關係を包攝せしむるに至つた所以のものは、未だ社會と社會現象

との區別を明瞭にせず、而かも反對關係が社會學上甚だ重大なる現象であることを認めてこれを社會學の領域より排除せんとするが如きことを爲すことも出來ず、遂に社會概念中に反對關係をも包含せしむるに至つたのであらうと思ふ。(Stuckenberg: op. cit. Pp. 136—7.) 然しかくの如くんば社會學の對象を以つて社會なりとするの見を去り、社會と社會現象とを明確に區別し結合關係も反對關係も共に含むところの社會現象なるものを以つて社會學の對象とすればこゝに則ち論者の要求は満足得られ、且つ社會概念の學的混亂より救はれ得るに至るであらう。^{*}かくいへばとて吾人は反對關係が社會内に於いても行はれ得るといふ事實を否認するものではない。例へば日本國內に於いて源平互に戰ふこともあり得る。而して源平共に同じく日本人といふ一社會中の人々であるとしても戰へる源平その人は其の相戰へる時に於いて又其の相戰へる限りに於いては決して結合即ち社會をなしては居ないのである。俳優がその装ふ所の衣装によつて種々様々なる人物となり種々様々なる行爲をなし得るが如く、人間はその接する時にとり出すところの面によつて他の同一人物との關係に於てさへ時によつて或は合し或は離反する。父子は父子として互に骨肉の血縁を結ぶけれども其の抱持する政見によつては時に水火犬猿の關係に

立つ。これ今日政争激しき地に於いて屢々吾人の見聞し得るところの珍現象である。彼等は等しくこれ同一の人物であり、又そは等しく同一人物によつて爲さるゝ「社會的關係であるが、其の接するところの面によつて彼等は或は與に社會を成し或は又反す。故に社會内に於いて又一の同じき社會の成員たる人々の間にある反對關係が成立し得るといふ事實も決して社會即心的相互作用といふ説を裏書する例證とはならぬ。吾々は次にこの心的相互作用説に連關してタルド及びヅルケムの説を考察したい。

*この點を明にしたるは即ち米田教授である。

タルドによれば、社會とは互に模倣せんとしつゝあるものとしての存在者或は現に模倣しなくとも相類似し、且、彼等の共通なる特性が過去に於いてある同一の模倣の複寫物であるものとしての存在者の集團である。(Tarde: *Les Lois de l'imitation*, P. 73)一言以つてすれば社會とは模倣である。(op. cit. P. 80)然らば彼の所謂模倣とは何かといふに模倣とは即ち一の精神が他の精神の上に或る距離をへだてゝ及ぼす作用である。又模倣とは一の腦髓的種板の影象が他の腦髓の感光板によつて寫眞の如く再現さるゝ事によつて成立する一の行爲である。更に又模倣とは精神相互間

の寫眞の凡ての印象であつて、それが有意的又は無意的なると、受動的又は能動的なるを問はず凡てこれ模倣であるといつて居る。(op. cit. Préface de la deuxième édition. P. VIII.) 即ち彼の所謂模倣とは普通に用ひられて居るところのものより更に廣汎で、それは番に行爲の上に於いてのみならず觀念、判斷、意欲、計畫等が心より心にそのまゝ傳達反覆さるゝ凡ての場合を含むのである。かくて模倣あるところ即ちこゝに一の社會的關係が成立つ。然し一の精神がある距離をへだてゝ他の精神の上に自己の印象を與ふる時必ずそこに社會ありといふことが出来るかといふに、あながち然うとも限らぬ。即ちある印象が他の精神に與へられる、それだけでは單邊的關係であつて未だ猶相互關係をなさず、従つてそこに社會はない。やがてその印象を與へられたるものが他に對し何等かの反動を起し他の一方が又之れを意識したる時こゝに始めて社會なるものが成立することが出来る。然し此場合必ずしも社會結合ばかりが生ずるとは限らぬ。何となれば一の心が他の心の印象をうけるとき、それが自己の存在を否定し自己の意欲に反對なる如き性質のものである場合に於いては、その印象に對してこゝに一の「反對」なる反動行爲が起されるからである。即ち模倣は必然的に「社會」の原因となることも出来ない。蓋し「互」に模倣するといふことは彼に

よれば即ち互に自己の印象を他に加へあふこと、換言すれば心的相互作用説そのものであり、従つて模倣説は社會即心的相互作用説と同様なる非難を免れることは出來ない。即ち彼の模倣なるものは彼の所謂「純粹に社會的」[purement social]なるものゝ最も機微なる點を道破し得たるものであるが、然しこれを以つて又「社會なるものゝ本質とする彼の社會概念を採ることは出來ないのである。

次にツルケムの説は如何といふに、先づ彼の社會學説はタルドの心理的社會現象觀に反對して彼自身によつて客觀的と考へられたる社會的事實なる觀念より出發して居る。而して彼の集團的事實とは集團的に考へられたる團體の信仰傾向及行動より成るもので、それは個人意識の外に存在し個人意識に自己を押しつけるものであると考へた。即ち社會的と認めらるべき特徴は要するに個人意識に對して外在的なること及び個人意識に對して強制作用を及し又は及し得るといふ二點に歸するのである。然しタルドもいへる如く個人意識の外に存在するとは如何なることであるか、若しそれが個人意識の交渉範圍外にありといふならばそれは社會學的考察の外にあるものである。且、強制といふこともギデインクスが批評したる如く多くの心が一の心に作用することであり、一の心が多くの心に作用する印象を見たるタル

ドの考と密接に關連して居る。即ちこの二人は社會現象の夫々ことなれる一方面づゝを見たものに外ならぬ。然しデュルクムの強制なるものはタルドの模倣が「社會的」なるものゝ本質であるところ考へられたるに反し、それは只社會的事實なるものゝ一特徴に過ぎぬ。然らばその所謂社會的事實、而して又社會なるものは何であるか。吾人が今必要とするところは社會的事實でなくして社會そのものである。然しこれに就いてのデュルクムの説明は必ずしも明確でない。今彼の論文 *sociologie et Sciences Sociales* によれば「個人意識が一定の仕方にて結合する時は彼等の間に交換さるゝ諸の關係によつて彼等が孤立せる時とは甚だ異なる新しき生活を生ずる。これ即ち社會生活である。宗教制度及信仰、政治的、法律的、道德的事實、一言以つてすれば文明なるものを形成する一切のものは社會なくしては存在することが出来なかつたであらう。實際文明といへば同一社會内の凡てのものが協働するのみならず、互に關係せるあらゆる社會の協働することを豫想する」といつて居る。思ふに彼は社會を以つて社會現象を作り出す地盤或は原因と考へ、而してその社會の本質として心と心との間に交換さるゝ諸關係或は又協働といふが如きことを特に重視したとも推測し得られると思ふ。今假りに彼の社會概念を以つて心的相互作用によつて行は

るゝ協働であるとしたならば如何。これに對する吾人の考は次にデヴィス、エルウッドの説の批判によつて知ることが出來よう。

以上述べたる如く、心的相互關係は社會の成立上缺くべからざる第一の條件であるが、然し心的相互關係ある處輒ちそこに社會ありといふことは出來ないといふことを述べた。然らば心的相互關係の如何なるものが即ち社會の本質であるか。これ次に吾人の考ふべき問題である。

今エルウッドによれば「社會とは抽象的にいへば即ち個人と個人との相互作用である」。又「具體的にいへば多少の程度に於いて互に意識的相互關係をなしあふ個人の團結であり、或は一層簡單にいへば心的相互作用をなしあふ個人の團結である」。然し「一團體に屬する凡ての成員は相共に働きて一の共同なる生活過程を營むものである」。今この *living together and working together in a Common life* なるものを以つて「協働」なりとすれば、この協働なるものは實に其の如何なる社會たるかを問はず一切の社會團結の一特徴である。故に社會の定義を更に正確にいへば社會とは即ち無意識的或は意識的に、即ち本能的又は反省的に協働する個人の集團である」。(Ellwood: *Sociology in its psychological Aspects*. Pp. 13-15) かくの如く見來る時は氏は相互作用と協

働とを混同せるが如く思はれるが、然し氏の眞意は協働を以つて社會の本質とするものである。即ち氏は又曰く「社會は心的相互作用によつて集團的生活を遂行せんとする個人の團結である。然し集團生活は明に個人的諸單位の活動が統整されるといふ條件に於いてのみ可能である。従つて社會學者に對する根本的事實は諸團體成員の諸の活動の統整或は相互適應である」(op. cit. Preface, p. 9) 即ち氏は協働統整或は相互適應が心的相互作用を條件とすることによつてのみ、而して又心的相互作用が協働統整或は相互適應を條件とすることによつてのみ始めてこゝに社會が成立し得るといふのである。氏に於いては心的相互作用によつて成さるゝ協働統整或は相互適應、即ちこれ社會の本質である。即ち氏の觀念はスペンサアの觀念を承け、しかも更に社會の眞相に近づけるものである。然り只社會の眞相に近づけりといふのみであつて未だ猶これを以つて「社會」の決定的本質概念なりとすることは出来ぬ。

蓋し氏の説は氏が明に言明せる如くデュヴィスの説の影響を受け、其の相互適應の概念はデュヴィスより借り來れるものである。(op. cit. p. 145. note.) 依つて今またデュヴィスの説を見るに、デュヴィスは社會の本質はその構成員の間に協働的行爲として表

はされたる適應であるといひ、又集結せられたる社會過程とは、相分離せる生物學的個體が其の共同なる或は統整せられたる行動によつて、より多く或はより少き度合に於いて共同の目的を達し、且社會過程の進むに従つて愈多く達せんとする爲めになすところの適應又は相互關係であるといつて居る。Davis: Psychological Interpretations of Society. Pp. 9. & Pp. 199.) 即ち氏も亦相互關係の下に行はるゝ協働、統整、或は適應を以つて社會過程又は社會の本質と見たるものである。然し協働と統整と適應とは果して全く同一内包の概念であるか。思ふに統整とは部分が一全體に統一せられたる靜的關係状態である。然もその諸部分の間に心的相互關係が働くことなれば社會とならぬ。然らば心的相互作用の上に立つ統整は即ち社會であるか、この問題は最後の問題として姑くこゝに保留して置く。次に適應は如何といふに適應とは有機體がその有機體內若しくは外の諸條件に適する如く或る反動をなすことをいふのである。然るにその内外の諸條件が不動にして單に有機體それ自身の調節に止る場合もあるが然し又其の反動によつて逆に内外の諸條件を統制制御する場合もあり得るのである。例へば或る黴菌の侵入したる場合、體内に抗毒素を生じ爲めに其の菌を絶滅せしむるが如きことも亦一の適應と見らるゝ。今これを社會

關係に就いて見る時は適應の結果として猶反對關係の起り得ることが考へ得られる。即ち適態は必ずしも社會をなさず。然らば協働とは如何といふに心的相互作用を前提とせざる協働説の不完全なることは既に述べたる通りである。然らば心の相互關係の上に立つ協働は社會といひ得るか。然り心的相互關係の上に立つ協働は確に社會である。然し逆は常に必ずしも眞でない。社會は凡てかゝる協働をなす個人の集團であるとは限らぬ。即ち協働以外の相互活動即ちギデイングスの所謂單なる交歡 *Converse* をなす所の有心物の結合も社會といはなければならぬ。蓋し *Society* 本來の意義も亦實にこゝにあつたのである。例へば途上久方振りに邂逅して互に款談せる舊友と舊友、公園のベンチにてゆくりなくも懇意となれるある一團の人々、此等は交歡以外何等の協働をも爲さぬのであるが明に亦一の社會をなしてゐるのである。而して心的相互作用の夫々の場合であるところのこの親和と協働と即ちこれ吾人が社會の本質と考ふる所である。即ちギデイングスのいへる如く社會なる語は或は單に親和和合を意味し、或は單にある目的の爲めに結合せる若干の個人を意味するけれどもそは語義として狭きに失する。而して彼がより大なる而して又科學的に重要な社會概念として擧ぐるところによれば、社會とは即ち意

識的生類の自然的に發達しつゝある團結であつて、その中に於いて親和は一定の關係となり時と共にその關係は複雑なる永存的體制となる如きものをいふのであるといつて居るが(Giddings: Principles of Sociology. Pp. 4-5)吾々は今彼の觀念をうけて「社會とは相親和し又は相協働する有心物の團結である」といはうと思ふ。然る時は吾人は更に進んで曩に保留せられたる統整の概念を考察しよう。

前述の如く吾人の考ふる所によれば統整とは部分が一の全體に統一せられたる靜的關係状態である。然も吾人が繰返し述べたる如くかゝる關係状態は決して社會の本質的特徴といふとは出來ない。それは決して社會特有の性質ではない。社會が社會たるは實にその成員の間に心的相互作用の働けるところに存する。心的相互作用は實に統整の畫龍點睛である。かくして我々の考ふる所によれば相親和し相協働して社會をなす時、その社會成員たる二人三人或は千萬人の間には何等かの統一的關係が存在するのである。而してこの統一を靜的抽象的なる關係状態として見たるもの即ちこれ統整そのものに外ならぬ。故に社會を形式的に定義する時は下の如くいふことが出來よう。即ち社會とは統整せられたる個人の心的相互關係によつて成る團結である。只この定義は形式的であり且統整なる語が一見明

瞭を缺き更に他の語によつて置き換へらるゝにあらずば其の意を盡さぬ感があり
 十全なる定義といふことは出来ない。而して吾々は前に擧げたる第一の定義は社
 會の概念を實質的に最もよくいひ表したるものと考へるのであるが、然しその親和
 協働なる二概念を更に統合して一語よく社會の本質を明にし得る如きものはない
 であらうか。吾人はこゝに於いてこの要求を満すべく共同の活動なる概念を以つ
 てしたいと思ふ。蓋し共同の活動とは二人三人或は千萬人が俱に與に共同共通の
 行動に關與し居ること即ちこれを實質的にいへば親和協働そのとに外ならぬ。親
 和協働ある處、多少の程度に於て其心相通じて一となり千萬の人之に依て一體とな
 り其間に一貫の生命の感通がある。即ちこれ社會そのものではあるまいか。彼の
 程伊川が「感すれば必ず應あり。凡そ動あることを皆感となす。感すれば則ち必ず
 應あり、應する所復感をなし、感する所復應あり、已まざる所以なり。感通の理道を知
 る者黙して之れを觀るべき也。」といひ、朱子之れに註して「天地陰陽の消長變化、人心
 物理の表裏盛衰、要するに感應の理に外ならざる而已。」(近思錄卷二)といつて居るの
 は亦社會及社會現象の眞髓を暗示する語として滋味頗る深きものがある。吾人は
 今茲に擧げたる旨趣によつて社會の概念を次の如くにいふことが出来る。即ち社

會とは相與に共同の活動に關與し且つこれに關與せることを潜在的に又顯在的に意識せる有心物の團結である。即ち以上の如く條件づけられたる「共同の活動」即ちこれ社會の本質的特徴であつて、これある處必ず只社會あり、社會ある處必ずその活動の行はるゝを見る。然らば謂ふ所の「共同の活動」とは如何なるものであり、又それは如何なるものにより如何にして成立するか、これを明にしなければ社會の眞相は未だ十分闡明せられたりといふとは出來ぬ。吾人は今只やうやくにして社會の殿堂の階段を昇り、僅かにその入口に立てるのみ、これが眞實景の闡明は尙他日の問題としてこゝに残る。(ア)